



TITLE:

<批評・紹介>影山剛著「中國古代
の商工業と專賣制」

AUTHOR(S):

佐原, 康夫

CITATION:

佐原, 康夫. <批評・紹介>影山剛著「中國古代の商工業と專賣制」. 東洋
史研究 1986, 44(4): 762-768

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154131>

RIGHT:

氏等が来日され、中國の研究と日本の研究が交流され、大變有意義であつたが、今後も、日・中及び、世界各國の研究者の研究協力により、戊戌維新運動史が一層解明されることを希望して置く。

なお、筆者の至らなきの故に誤解があるのではないかと恐れる。

註

(1) 拙著『戊戌變法運動史研究』上 四國學院大學東洋史研究室
一九七八年。(第四版)

(2) 拙稿「變法運動と報館」『集刊東洋學』四五 一九八一年。

(3) 湯志鈞氏は、氏の近著『戊戌變法史』(人民出版社 一九八四年)の後記において、本論文について觸れ、新資料を提供し、新問題を提出していると述べられている。

一九八三年八月 湖南人民出版社

A四判 三九四頁 一・六〇元

影山 剛著

中國古代の商工業と專賣制

佐原康夫

本書は著者影山剛氏の三十年に及ぶ業績を収めた書である。内容は書名の示すとおり、中國古代の商工業と都市の研究、前漢武帝時代の鹽鐵專賣制の研究の二つの部分から成っている。ともに著者のライフワークともいふべき研究の集大成であり、學界待望の書と言える。その出版をまず喜びたい。

收められた論考は、古くは一九五〇年代に發表されたものもあるが、全ての章について現在の時點での加筆や訂正、注釋が施されており、事實上新著といつてよい。その構成を大まかに紹介すれば次のようになる。

I 中國古代の商業と商人

II 中國古代における手工業・商業と身分および階級關係

附 前漢時代の奴隸制をめぐる一、二の問題の覺え書

III 中國古代の鹽業の成立とその展開

IV 中國古代の鹽業の生産組織と經營形態

——主として專賣制以前に關して——

V 前漢朝の鹽の專賣制

VI 中國古代の製鐵手工業と專賣制

補論

VII 後漢朝の鹽政に關する一、二の問題

VIII 鹽鐵專賣制施行の時期、その他專賣制初期の諸事情

附 鹽鐵論について

IX ト式について

X 漢代の經濟觀と中國古代商業および古代專制國家の經濟政策をめぐって

XI 中國古代における都市と商工業

多岐にわたる本書の内容を詳細にたどることは容易でないが、大きく分ければ、I〜II章・X・XIの各章は商工業と都市について、またIII〜IX章は鹽鐵專賣について論ぜられている。以下テーマに従つて章の順序にはこだわらずに紹介しよう。

まずI章「中國古代の商業と商人」は本書全體の序論にあたる。

もと概説として執筆されたものを大幅に増補した力作であり、著者の古代商工業論のエッセンスを読むことができる。中國古代商業の發展の論理的前提は、農・工の分離を中心とする社會的分業の發展と商品生産・流通の一般化、さらに貨幣の存在である。また春秋末から戰國時代にかけて鐵製農具が普及し、農業生産力が増大したことが商業の發展の歴史的條件であつた。小農民の經營はこの過程で部分的に交換經濟に依存するようになるが、彼等の購入する商品の中で特に重要な位置を占めたのは鹽と鐵器であつた。ところで鹽と鐵はいずれも産地が特定の土地に局限されており、大多數の農民にとって鹽と鐵器は遠隔地から運び込まれる商品である。また時代の制約として交通網の未發達が個々の市場を結びつくにくくしており、遠隔地との取引には偶然性と商人の欺瞞がつきまとうこととなる。従つて鹽や鐵器は農民の死命を制するほどの重要性を持つているにもかかわらず、投機的大商人の獨占に歸し、その利潤は農民との不等價交換に基くものであつた。かくして大商人は必然的に國家の農民收奪に寄生した存在となり、小農民を兼併して大地主に轉化してゆく。しかし小農の没落は專制國家の大きな矛盾となり、國家は商業の抑制に乗り出さざるを得ない。そのための制度が都市に置かれた市であつた。商業は法制的に嚴格に制限された商業區である市の内に限定され、國家は取引に對して行政的管理と權力的關與を行ない、また商人に對しては營業登録と身分差別の手段として市籍の制度を利用してゐた。このように、古代の都市においては經濟的諸關係は專制國家權力の制度と結合した形で現れるのである。しかし地主に轉化した大商人たちはこの規制の外にあり、兼併された農民を自給自足的莊園經營に取り込むことによって貨幣流通から引き

離す役割を果たした。商人による兼併は結果的に商業と都市の衰退を招くこととなる。古代商業はその歴史的過程の中に、商業自體を沈滞させる條件を生み出したのである。

Ⅱ章は身分と階級關係から國家と商工業の關係を論じている。市と市籍の制度の分析から、商人に對する身分統制は社會的分業を矛盾なく國家の身分制秩序に包攝し固定化することを意圖しており、商人の身分的賤視と社會的實態としての商人の農民收奪との間の矛盾が、國家の抑商政策の強化、すなわち專賣制と均輸・平準制を實現させたとする。

X章はこの過程を思想的に論じたものである。社會的分業關係の中で商人は流通の媒介者としての役割を果たすが、反面で投機行爲などその役割からの逸脱を警戒された。しかし當時の思想において國家の富國策と個人の貨殖術は同一の次元で考えられていたために、抑商政策として桑弘羊が企畫した均輸・平準と貨殖家の商業經營が共通する側面を持つことになった。ところで貨殖家の投機的商業は本質上不安定であり、國家が恒常的に流通を操作することで成り立つ均輸・平準は破綻を免れなかった。他方この時期に、土地經營を安定した家産管理の代表と見なす考え方が、國家財政における農本主義と平行して現れる。この思想が桑弘羊らの商業國家的政策に代る指導原理たる儒家的農本主義であつた。

XI章は都市と商工業の關係を扱う。中國古代において商工業は都市の重要な屬性ではあるが、本質ではない。古代の都市では經濟と未分化な状態で政治が優先されていた。その具體的表現が、郡治・縣治といった城砦的都市とその外部に廣がる治安機關たる亭である。さらに城壁外の聚落にも、都市内の制度の延長として里制が適

用された。このような政治的都市に置かれた市は、その都市の住民を對象とする孤立的な小市場であり、その基盤は都市に住む農民と手工業者の分業にある。しかしこのような孤立的市場の間に生ずる價格差が、鹽や鐵など重要な商品を獨占して遠隔地からもたらす大商人の暴利の源泉となった。このことは鹽、鐵器などの手工業生産が、それ自體としては都市を構成しないことを意味する。従つて古代都市は農民の住む政治的都市であり、その經濟の重要度は政治的 중요度に比例する。都市と都市とは行政的統屬關係によつて結ばれているだけで、廣い市場圏は形成されなかった。

さて、以上の要約でも明らかのように、著者の商業論の鍵となるのが商品生産の代表としての鹽と鐵器の生産と流通の問題である。

Ⅲ章ではまず鹽業について、その成立と發展の基礎を探っている。中國古代において鹽の代表的産地は河東解州の鹽池と齊の海岸地域であり、ここから鹽の大商人が出現している。鹽の需要は戰國時代から漢代に至る時代の人口増加によつて著しく増大した。さらに食品加工の發展と食生活の變化によつて鹽の需要はますます増加し、鹽は重要な商品となった。これに伴つて鹽業は從來の齊の海岸部から北の燕、南の江東へと擴大し、漢代には内陸の巴蜀においても井鹽が開發される、といった地域的擴大が見られた。

續くⅣ章では專賣制以前の鹽業の生産組織と經營形態が扱われる。中國古代の鹽業技術においては、入漬式の鹽田は見られず、鹽水を直接煮つめて鹽を採る方式（煮鹽）が用いられた。その生産工程は鹽水の採取・運搬・煮沸・煎熬と採鹽に分れるが、このうち煮沸工程に鐵器が導入された結果、效率が大幅に向上したと思われる。また、生産量を決定する要因として燃料が重要である。さて、

この工程で用いられる勞働力は主として雇傭に依存していたが、その主たる荷い手として農民を雇い入れるだけでは農事の繁閑による變動を免れない。そこで多數の貧農や離農者、亡命者が鹽場に雇われ、經營者に奴隸的從屬を強いられることとなった。大規模な經營においてはこのような隷屬的勞働者が千人を超える例もある。大商人による大規模經營の基盤は、君主からの山林藪澤の假與による鹽場の獨占と生産用具の獨占にあった。しかし生産性の面では、大規模な經營も基本的な生産單位である竈・鍋等の集積に過ぎず、小規模な經營と質的差はない。従つて大鹽業者は流通過程の支配によつて初めて市場の獨占が可能となる。彼等は遠隔地への流通網を支配し、價格操作によつて莫大な利潤を得た。これが專賣制の實施を導く歴史的前提となった。

Ⅴ章では續いて前漢の鹽の專賣制が取り上げられている。まずこの制度は財政收入の不足を背景に、民間鹽業者の收益を國家に編入することを目的としていたが、それにとどまらず、專制國家の矛盾が集中的に現れる商品生産と流通を國家の統制下に置こうとする、專制國家の必然的要求でもあった。このような專賣制下で、鹽場は帝室財政から國家財政に移管された山林藪澤に置かれ、鹽官が管理する國有の施設となった。鹽の生産は一定の自立性を持った生産者が生産費（例えば燃料費）を自己負擔し、官有の生産用具によつて生産する方式で行われた。生産した鹽は國家に納入され、手當・報酬が支給される。こうして鹽の生産からは大商人が排除され、國家が募集した小規模生産者に分散された。また大商人が獨占していた流通販賣部門については、國家的運輸組織（僦運）と販賣管理（鹽官が擔當）が行われたが、後に均輸制の實施により、流通部門は均

輸に依存するようになった。なお、排除された商人の中には、官界に入って專賣の實務を擔當する者もあった。

次いで第Ⅵ章では專賣制のもう一つの柱である鐵器の生産と流通が扱われる。鐵の用途は様々だが、兵器などが國家機關で生産されたのに對し、農具の生産は大商人の獨占に歸し、巨大な企業を生み出した。従つて鐵器の專賣の對象は農具が主眼だった。ところで當時の製鐵技術の特色である鐵器の鑄造には、高爐の設備が必要であり、ある程度の規模の生産施設がなければならなかった。とはいへ、如何に大きな製鐵施設も基本的には單位となる爐の算術的集積に過ぎず、大商人の利得は鹽と同様、やはり流通過程の支配から得られた。專賣制下の鐵器生産は、各産地に置かれた鐵官で行なわれ、工あるいは工匠と呼ばれる技術者と、單純勞動に従事する卒・徒が作業班に組織されていた。流通部門も完全に國營化された結果、農具の價格は平均化されたが、反面で生産物の官僚的畫一化も見られ、必ずしも農民の必要に對應していなかったのが實情であった。この章には補論が附せられているが、その中ではさらに發展して鐵の流通の末端では製品の種類によつて分散・零細化した民間の業者が關與することもあり得るとしている。

以上がⅤ、Ⅵ章の主旨であるが、周知の如く專賣制については著者と藤井宏氏、伊藤徳男氏らとの間で戦わされた論争があり、當然それを踏まえた内容となっている。注、補注、補論の形で分散されているが、著者は努めて相手の論旨を要約した上で反論を加えている。ここに記した評者の要約は、著者の主張のみを抽出したものであることをお断りしておきたい。

さて、續くⅦ、Ⅷ、Ⅸ章は專賣制の實施をめぐる様々な問題が扱

われている。Ⅶ章は專賣制崩壊後の後漢朝の鹽政について。後漢代には、鹽官は鹽稅を擔當し、鐵官は武器などの直接生産に當るのみで、鹽、鐵器ともに民間業者が復活した。しかし大商人が出現しないのは、古代商業がすでに沈靜期にあったためである。

Ⅷ章は專賣制實施の時期やその間の政治的事情の考證にあてられている。著者は諸說を検討した上で、專賣制實施の奏請がなされたのが武帝の元狩四年、實際に制度が始動したのが元狩六年ごろとした。また制度の始動後も、各地に鹽官や鐵官が増置され、鐵を産しない郡に置かれた小鐵官では故鐵の再生や他郡からもたらされる鐵器の流通に關與したことを明らかにしている。この大改革の基本的な構想は御史大夫張湯によつて立てられ、具體的な企畫と實施は孔僅・東郭咸陽の手によるものだったが、張湯らが相ついで失脚した後、桑弘羊に引き繼がれた。

Ⅸ章ではこの時期に活躍した卜式という人物を取り上げ、武帝の軍事的膨脹政策を禮贊した彼が、武帝の意を汲んだ財産の獻納によつて登用され、告終や列侯の酎金事件に關つたことが推定されている。

以上が著者の鹽鐵專賣論であるが、通讀してみると、鐵器の生産と專賣に關する記述が相對的に少ない憾がある。また、著者の「均輸・平準と鹽鐵專賣」（岩波講座世界歴史4、一九七〇）を始めとする均輸・平準に關する論考が收められていないのが残念である。

が、これについては最近著者の手によつて新たな展開が見られる（「桑弘羊の均輸法試論」東洋史研究四〇―四、「桑弘羊の平準法試論」三上次男博士喜壽記念論文集、山田勝芳氏との新たな論争もある）、恐らく現時點では割愛せざるを得なかったのだろう。

著者の研究の今後の展開に期待したい。

さて、対象を本書の範圍に限って言えば、著者の商工業論の大前提となるのが鐵製農具の普及による生産力の増大であることは異論のないところだろう。そして代表的商品たる鹽と鐵器の生産地が交通の不便な特定の土地に局限されていたために、大商人の生産と流通の獨占と投機的不等價交換を惹起したことが、商工業の發展と專賣制の質を規定している。この考え方が本書の全篇を通じて讀みとれる、いわばライト・モティーフである。そこで鐵器の問題を中心に検討してみたい。

著者の論を検討してみると、この説の根據となっている史料は、『鹽鐵論』復古篇の「往者、豪強大冢得管山海之利、采鐵石鼓鑄煮鹽。……聚深山窮澤之中、成姦僞之業、遂朋黨之權。」という記述に限られていることに氣づく。しかし鐵鑛山は辟遠の「深山窮澤」だけでなく、「銅・鐵は則ち千里にして往々山より出で、某のごとく置かる。」(『史記』貨殖列傳)と言われるように、中國全土であちこちに見られたのではないだろうか。また、戰國時代から漢代にかけての様々な都市遺構の内部や周邊から、かなりの數の製鐵遺跡が発見されており、都市における鐵器生産(農具、工具、兵器、車馬器等)がかなり盛んだったこと、その中には鐵官も含まれていることが明らかになっている。著者の理解は『鹽鐵論』の記述の過大評價に基いているように思われる。これが實證的な面での問題點となろう。

次に、著者の論理に沿って考えてみよう。遠隔地で生産された鐵器が、獨占商人の手で、偶然的・欺瞞的取引によってもたらされ、價格が農民收奪といえるほどに高かったとするならば、鐵器はそも

そも農業を始めあらゆる産業に行き渡り得たのだろうか。評者はこの點に素朴な疑問を感じる。著者のあげた條件、すなわち生産の地域的局限性に基く投機的取引は、南海に産する眞珠やタイマイのような奢侈の特産品には當てはまるとしても、鐵器には當てはまりにくいように思われる。さらに言えば、著者の重視する獨占的大商人は、鐵器の使用が廣範に普及した後で出現した一部の特殊な事例としても考えられるのではないだろうか。これについては既に角谷定俊氏が、戰國秦の鐵器生産が民間業者の獨占状態だったとは言えないことを明らかにしている(『秦における製鐵業の一考察』駿臺史學62號、一九八四)。このことは、『史記』貨殖列傳に記された商人たちが、例外的少數の成功例だから記録されたのか、それとも多數の中の代表例として選擇され記録されたのか、という根本史料の評価の問題にもつながるだろう。

鐵器の生産に關するこのような疑問は、著者のいま一つ的前提となる市場の孤立性の問題とも結びつく。鐵器が遠隔地から偶然的にもたらされるに過ぎない商品であるならば、各地に散在する小市場の基盤である農・工の社會的分業の發展を促した生産力の發展は、何によって繼續的に進行し得たのかが不明となろう。また逆に遠隔地で生産された鐵器が全國のほぼ全農民にまで行き渡ったとすれば、それはかなり廣い市場圏の存在を意味するのではないだろうか。これは論理の矛盾であると言わねばなるまい。むしろ、古代の商工業の發展は、中國の全國各地で小市場を出現させた社會的分業の具體的な發展のあり方にこそ規定されるのではないだろうか。この過程は各地の都市の發展にも大きな影響を與えずにはいないだろう。都市が本質的に政治的な存在であるとしても、その中で展開し

た經濟活動の分析は獨自の課題として意味を持ち得るように思われる。鐵器の生産と流通の問題はこのような研究の文脈において新たな位置附けが可能となるのではないだろうか。

ところで、鐵器の問題はこのような社會的側面だけでなく、生産技術の問題をも含んでいる。中國における鐵器生産が、鍛造ではなく鑄造から始まったことはすでに周知の事實である。が、この中國獨自の技術がどのように廣まり、製品に對する多様な要求に如何に答えていったのかを問うことは、鐵器の專賣制というドラスティックな改革の技術的側面を問うことにもつながる。本書においてこの問題は、專賣制下の生産組織に關する著者と藤井宏氏や伊藤徳男氏との論争の形で提起されている。多岐にわたるこの論争の一貫した争點は、專賣制下の鹽・鐵器の生産が官營か民營かという點に盡きる。評者はこれについて詳細に論ずる能力を持たないが、生産技術の面から見れば、技術者たる工あるいは工匠が、官營の生産施設に雇われるにせよ、または民營の施設で生産するにせよ、彼ら専門的技術の持ち主が多數民間に存在するという點で兩者の見解は一致しているように思われる。とすれば、官營か民營かの論議は、生産施設の所有者が誰であるかに限らず、技術者を始めとする勞働力を誰がどのように組織するのか、また國家はそれらをどのように把握していたのか、といった問題に踏み込まざるを得ない。本書の一部でこれらの問題に觸れられてはいるが、結論を急いで考察が不十分だと思われる點もなしとしない。この活潑な論争を不毛なものとしたためには、專賣制下の鹽鐵生産が官營か民營かを制度面から二者擇一的に論ずるのではなく、生産の具體的な過程の分析から出發して國家の果たした役割を見極めていく、細かい作業の積み重ねが必要

ではないだろうか。近年、鞏縣鐵生溝の製鐵遺跡の分析から様々な鐵器の生産工程が復原されている（考古學報一九八五—二）し、冶鐵に用いたと思われる坩堝を副葬した、前漢中晩期の墓葬も發掘されている（考古與文物一九八二—三）。この墓が冶鐵工匠の墓であるとすれば、專賣制施行後にも一定の生産手段の私有はあり得たことを示すだろう。このような考古學的資料などを併用すれば、『史記』平準書の新たな讀み直しも期待できよう。これは著者のみならず恐らく學界全體の課題でもある。

以上、評者の淺學も顧みずにあえて疑問を述べたててしまったが、本書の内容はもちろんこれをはるかに上回るものである。商人に對する身分統制の問題、都市と商工業の問題など、限られた紙數では論じ盡せぬ豊かな内容を、本書は持っている。本書は中國古代の商工業と專制國家の內的關連を論じた數少ない專著であり、商工業の成長から衰退までの過程を論理的に把握しようとした貴重なパイオニアワークとして評價されるべきである。今後この分野の研究にあたって絶えず参照される基本的文獻の一つとなることは間違いない。評者の述べた疑問は、著者の研究をいかに繼承、發展させて行くか、という關心から發したものに過ぎない。

本書に收められた論考はそれぞれ發表された時點で學界の論議の對象となり、多くの研究者を觸發してきた。本書の隨所に見られる著者の加筆訂正のあとや論争の要約などは、その生々しい記録である。批判に對して常に誠實に答えんとする著者の姿勢は我々にとって模範となすに足る。本書の跋において著者は自ら本書を「滿身創夷の狀態」と評しているが、これはむしろ絶えず學界をリードしてきた著者の名譽でなければならない。著者に觸發された後學の一

人として、この拙い書評が本書の内容を誤解していないことを祈るばかりである。

一九八四年十一月 東京大學出版會

A 5 版 五三〇頁 七〇〇圓